野呂介石傳の研究（三）

森　銑　三

十三

翌文政九年、介石は八十歳に達した。略年譜のこの年の條には、「老公賞翁壽賜時服」とあり、家譜にはそのことが、「舜恭院様より御内々時服拜領」としてある。舜恭院は紀州徳川家の第十代治寶である。

この年の介石の谿流梅竹圖が東洋美術大觀第七冊の内に收められてゐる。急斜の谿川を中にして、その兩岸に梅があり、竹林があり、遠くには介石の常に描く頭部の圓い山が擢でてをり、高淡の筆致、凡手の及び難いことを思はしめる。上に「我愛晩風新」云々の梅道人の五古一首を題し、「丙戌中元漫書之、須臾忘苦熱、八十歳癡叟隆」としてゐる。八十の高齡にして、且つ七月の殘暑の候に、介石はなほかやうな密畫を作る氣力を有してゐたのであつた。この圖は和歌山島村富次郎氏の所藏に係る。

なほ、この年の介石の作品老松圖が南畫集に載つてゐるが、筆力のまた大いに認むべきものがある。それには七絶一首を題して、「八十歳老人介石」としてゐる。この圖は菊池長四郎氏の所藏であつた。恐らく震災に亡びたのであらう。

介石の八十を賀して、社友達は賀筵を開いた上に、祝賀の書畫や詩文を廣く求めようとしたが、介石は、七十の歳に贈られた書畫で生涯の樂は足りてゐる。人々からさやうに作品を貪り集めることは好ましからぬといつて、つひにその企を實行せしめなかつた。

翌文政十年に介石の描いた那智瀧の圖が、また日本畫大成第三十三卷の中にある。落款に、「那智瀑布、文政十年八十一翁介石」としてある。それは往年の作の如き緻密のものではないが、すでに八十を超えて、なほかやうな畫を作つてゐる點に興味が惹かれる。畫乘要略に、「晩年神力不衰、腕力益勁」としてゐるのは事實だつたのである。

この年五月十五日に、紀伊國那賀郡平山の外科醫華岡青洲の塾に在つた本間玄調が、鄕里常陸に在る養父本間道偉に宛てゝ一書を裁したが、その中に一六の日に和歌山に出張する師青洲の供をして同

地に到つたことを述べ、それについで、「御家中に野呂九一郎と申人、號介石、大雅堂の高弟にて、此方にては大きに評判の畫に御座候。立もの一軸にて貳兩或五兩位迄の直だんに御座候」といつてゐる。この介石の畫の價格のことは、すでに引いた近藤芳樹の書簡と併せ見るべく、介石の聲譽が晩年に至つていよいよ擧つてゐたことが、これに據つても知られて來る。右玄調の書簡は、靜嘉堂文庫に藏する小宮山楓軒の手寫本諸家手簡所載のものに據つた。

その翌文政十一年の春、再び時服拜領のことがあつた。家譜に、「同十一子年二月十一日、舜恭院樣より御內々紅裏時服拜領」としてある。それより一箇月の後に、死が介石を襲うた。同じく家譜に、「同年三月十四日病死」としてあつて、それに「于時八十一歲」と註記してあるが、八十一歲は八十二歲の誤でなければならぬ。略年譜のこの年の條には、「二月十一日老公賜紅裏時服、三月十四日歿、葬于和歌山吹上護念寺」としてある。介石の法號は四碧院節翁介石居士といふ。これは紀伊人物誌に見えてゐる。ついで護念寺には養嗣子隆忠に依つて、山本惟孝、號樂所の撰文になる墓碑が建てられた。その文の南紀德川史に載せてあるものは、數字が磨滅のために不明になつてゐるが、幸にそれは田能村竹田が阿部縑洲より借寫して屠赤瑣瑣錄卷四の中に載せておいてくれたのに據つて知ることが出來る。こゝにはその磨滅の箇所だけを摘出しておくこととしよう。

「父諱方紹、君其五子也」「爲人淵默耿介、頗抱憂民之志」

介石は人となりが淵默耿介で、憂民の志を抱いたといふ。もとより單なる職業的な畫師ではなかつたのである。

介石は、その歿前幾日であつたか、その姻戚坂上某のために歲寒三友の圖を作つたのが絕筆となつたが、その內の梅だけに題款して、未だ松と竹とに及ばず、山陽にその補塡を請ふべきことを遺言して逝いた。依つて坂上生は、後に同圖を京都の山紫水明處に齎して遺囑を傳へ、山陽はために七絕三首を題した。詩は賴山陽全書の詩集の中に、「題介石翁絕筆畫松竹、遺言囑題於余、三首」として載つてゐる。今その內の一首を抄出する。「石翁描竹還描竹。竹石相偎太有情。記得留吾竹深處。烹茶石上聽秋聲。」

この詩は文政五年の舊作を改訂したので、舊作の方には、轉結が「何日留吾竹深處。烹茶石上坐斜陽」とある。文政五年にすでに介石の竹石圖に題したことがあつたのである。介石の姻戚の坂上某といふはその人を詳かにせぬが、前述の竹石追悼書畫展觀目錄の紀伊國の條には、阪上梅園、竝びに阪上湛澳の名が見えてゐる。某は或はこの內の何れかではなかつたであらうか。後考を俟ちたいと思ふ。

なほ山陽先生題跋には、「題介石絕筆畫」の一文があり、更にその前にも「題介石畫後」「跋介石橫卷」の二文があるが、その後者の橫卷といふは恐らく介石より贈られたところのもので、然らばこの文はまた文政三年に成つたのであらうと思はれる。

十四

略年譜には、介石歿後第一年の文政十二年の條になほ「門人所筆記介石畫話成」としてゐる一條があつて終つてゐる。この介石畫話はすなはち四碧齋畫話と同一であらう。次號に附載するものがすなはちそれである。私はこれを靜嘉堂文庫本から寫した。同文庫本は半紙判の罫紙で墨附十二丁ある。寫は新しいが、いづこの藏本に據つたとも斷つてない。これは他にもまだ藏本がある筈であるが、現に私の知つてゐるものはこの一本に過ぎぬ。從つて他本との校合のなし得なかつたことを斷つておかなくてはならぬ。

この年の晩夏、大津の人で山陽の門下だつた岩崎鷗雨が、師に介石の小圖卷の借覽を乞うた。山陽はそれを許すことは許したが、或はそのまゝ返さぬ腹ではないかと豫測して、鷗雨に宛てた書簡の中でつぎのやうにいつてゐる。

被仰下候義皆々承知、獨有一事萬不承知は、袖卷豪奪之氣味也。老人以僕爲一代知已、然僕所藏有立軸與此卷而已。若爲他人有、何以見老人於地獄哉（註。僕與老人、並非生極樂者、故下此字）と御思召可被下候はゞ、近日御上京之時御返投可被下、尺木も隨分御借し申候。可々秘々。

山陽の張つたこの豫防線には、鷗雨も破顔一笑せざるを得なかつたであらう。介石の圖卷は山陽の祕藏するところとなつてゐたのである。山陽は右書簡の註記に於て、「僕と老人と、並びに極樂に生る者に非ず」といつてゐる。しかし山陽自身はとにかく、介石をも己と同列のしぶとい人物のやうに見てゐるのはいかゞであらうか。たとへ一時の戲言にもせよ、この一事は些か筆が走過ぎたとすべきであらう。なほこの書簡には「六月十四日」の日附があるのに過ぎないが、賴山陽書翰集の推定に從つて、これをこの年のものとする。

天保三年は介石歿後の第四年であるが、この年の晩秋、介石の知己を以て自ら許した山陽が五十三歳にして歿した。介石と山陽とのことはすでに知り得ただけを敍述し來つたが、奥田氏の「賴山陽と野呂介石」第二回の中には、山陽が介石よりその作品二點を贈られた以前に、すでに介石の南海遺珠帖といふものを所藏してゐたことが記してあり、その帖に附されたる海屋の跋文も載せてある。その文はすなはち左の如くである。

右無款印介石畫山水一帖、故山陽平生之愛玩、蓋取畫法於此云、山陽歿後、有故歸前越畊雪山人之手、山人持參示余、索題前四字、畫固一見可定、又有山陽常用山紫水明印在、乙卯之歲長至後一日、菘翁題。

乙卯は安政二年である。奥田氏に據れば、この帖は今所在が不明といふ。山陽の畫の介石より來つてゐるものの多いことは同氏の力說せらるゝところであるが、右の海屋の跋は、そのことを裏書するのである。

その翌天保四年、篠崎小竹は介石より得たその畫に雲華の贊を乞ひ、雲華はために七絶一首を題した。それは「爲小竹翁題介石山水」として、雲華上人遺稿の中に載つてゐる。「三人同訪矮梅居。席上揮毫畫又書。一幅雲烟君愛惜。舊遊零落已無餘。」

介石の門人については畫乘要略に、「其弟子紀之蔡徵、有竹、及攝之僧少林、皆上其堂」としてある。蔡徵のことは竹田莊師友畫錄に、「蔡徵號白雪、介石老人之高足弟子也。予於老人處數相會、時以褙裝爲業、近聞、其畫爲國公賞識、拔爲畫員、給祿五百石」と見えて

ゐる。師友畫錄は天保四年に成つた。右の中に「近ごろ聞く」としてゐるのは天保の初年のことだつたのであらう。なほ墨林清芬に據れば、白雪は野際氏で、伯龜と字し、白雪の外に石湖とも號した。蔡といつたのは、氏の野際を修した上に、際と同音のその字を假り用ひたのであつた。野際蔡徵とせるもののあるは誤である。嘉永二年七十七歳にして歿し、介石には十四歳の後輩だつた。その簡單な系譜が南紀德川史卷六十二に載つてゐる。

有竹は從來その姓氏も不詳とせられてゐたが、前に引いた竹石追悼の書畫展觀目錄紀伊國の條の內に「前田有竹」とあるのを見れば、前田氏だつたのであらう。有竹はその追悼に絹本の淡彩雨餘春曉圖を寄せたのであつた。そして白雪もまた絹本の淡彩山陰幽居圖を寄せてをり、名は「蔡白雪」として出ててゐる。

僧少林は、名を導淳、字を臣翁といひ、少林の外に黃峰とも號した。攝津の小松村にゐたが、もとは三越の人だつたらしく、越僧黃峰と自署してしてゐるものもあるといふ。山水花卉を善くした。少林のことは細川十洲翁の近世畫史に據つたが、相見香雨氏より聽くところに據れば、この人には介石との合作の山水などもあるといふ。

十五

介石を傳してすでにその歿後に到つたが、こゝに年紀不明の介石の書簡數通を纏めて載せて、この不備な研究を終へることとしたい。最初に出すのは、史料編纂所の影寫本本居文書中にあるものであるが、それを通して介石の晩年の生活の一端に觸るゝことの出來るのを悅とする。

藤垣先生玉几、第五隆年□□

昨日者芳墨恭拜誦仕候。祁寒栗烈御座候處、益御安泰被爲揃、奉敬壽候。御跡にて承候得ば、御顧臨被下候由、須臾なり共御休足被下候はゞ大慶可仕、御殘多奉存候。古事記傳御題字本御仕立出來、一卷私へも御惠投被成下、御懇情別而辱仕合奉存候。綏々拜誦可仕、不少辱仕合奉存候。○且難波饅頭一箱中恭領、不打置拜賞可仕、萬々辱仕合奉存候。○先達而何角拜讀被仰付辱仕合、速に完璧可仕筈、怠慢多忙、其時限り廢忘、御却申上候事も相忘、恐懼不少奉存候。先存出候まゝ萬葉集石刻二冊完却仕候。此外に何やら角やら拜借仕候事相覺居候得共、いか成御品にて有之候哉、悉失念仕候。野叟立揚候事不相成候故、坐右之邊何か借用之品可有候間、見出し候樣申付候而も、老婆是も亦忘多、いろ〳〵索探仕候而も見當り不申、乍御面倒、いか成御品との事、御教示被成下候はゞ、夫を便に搜させ申度候。恐入候得共、ちよと御示令可被下候。奉庶幾候。○鄙畫認メ有候物在之候はゞ獻覽仕候樣、容易之御事に奉存候得共、折節認有之候もの無之候。此草畫一二葉、正月當に壽畫認置候もの、先備高覽候。其內何か認候はゝ備高鑒可申候。昨日之御請迄、匆々申上候。以上。十二月十七日。

尙々此羊羹、乍輕薄呈上仕候。御叱留奉希候。以上。

最初の一行は卷止を裏返したのであらう。「藤垣先生」は「藤垣內先生」の誤で、すなはち本居大平である。その下に介石が己の名を、「第五隆」ではなくて「第五隆年」としてゐるのが珍しい。つぎの二字に蠹蝕があるが、これは恐らくは「再拜」であらうと思ふ。

介石は大平から御題字本の古事記傳を贈られたことを感謝してゐ

る。御題字といふは、紀伊侯徳川治寶が「古事記傳」の四字を揮毫して賜つた事實をいふのであるが、大平の年譜に據れば、それは文政五年のことだつた。よつてこの書簡もその年以後のものたることが知られるのである。

「野叟立揚候事不相成候故」と介石はしてゐる。この頃すでに腰が立たなくなつてゐたのである。しかし前文に、昨日留守中に大平の訪問を受けたことを述べてゐるのを見れば、乘物を利用して外出することなどは出來たのであらう。

終に介石は、大平から畫を乞はれたのに對して、正月の壽畫として揮毫しておいたものを贈つてゐる。新春の畫を、すでに十二月の中旬に描いてゐたのである。

つぎに今一通本居文書所載の書簡を掲げる。

本居三四右衞門樣、野呂九一郎。

拜啓仕候。祁寒栗烈之處、益御安泰被爲揃、奉敬壽候。誠此間者御顧臨被成下、辱仕合奉存候。暫不奉得拜顏、御疎濶罷過、自是御容體奉窺(?)候筈之處、先月中旬比齒牙舊跡痛强、折節寒邪感冒熱解かね候而、一圓平臥困窮仕、心外御無沙汰罷成、重々恐入奉存候。先回も御過臨、其節は好嗜煎茶及御菓子等御惠投被下、每渡御厚情多々、奉恭謝候。扨蒙仰候賤字、惡好は格別速相試、御了簡も可有御座哉否、備淸鑒申度企居候へ共、日々過客に被相遮、其上且は齒痛肩疼等にて踟躊致候內、寒邪に被冒候而、段々延滯、いか計恐入候。强勉强試候得共、拙陋之上老眼十倍相鈍り候而、甚見苦布御坐候故、申譯迄御心情奉慰候迄に揮筆仕候。此間志賀生へも御加言申陳候事も御坐候。老人之鄙情必御遠慮不被下、御棄擲可被成下候。御懇意之間、如斯の場所に決而御頓着被下間布候。尤御國域之內々にも無御座、東西南北八方へ流布可有之書卷、殊御題書之所謂も候へば(?)、迚もの義、能書御撰被成候御方可然、吳々此段御內談申上候。餘期拜話候條、先備經覽候。頓首。十二月念四日。

これに據れば介石は、大平から書物の題書を依賴せられて、それを認めてゐるのである。それは何の書だつたか明かでないが、もしそれが大平の著述で、大平が介石の書をそのまゝ用ひてゐるならば、調べて見れば分りさうに思はれるが、まだそれだけのことをする暇を得ないでゐる。

本居文書にはなほ一通介石の短簡が收めてある。これは內容に乏しいが、ついでにこゝに附載しておかう。

本居老詞宗侍側、第五隆再拜。

芳墨恭拜閱仕候。寒威日々相襲候處、益御安泰奉敬懌候。時々御噂申上候得共、多少紛雜、御無音申上候。扨は京村(?)之名產見事之葱根御投惠被成下、別而潤茶品々拜賞可仕、動喰指抔喜不些奉多謝候。御暇拜謁候條、先御請迄、匆々頓首。復月旬九。

再白、此柚實豉、乍些麁製、御きらゐかも不相計、任幸便呈一□、器物共御留置可被下候。以上。

今になつて氣が附いたのであるが、これは文化十年介石六十七歲の書簡であつたらしい。その年十一月に閏のあつたことがそれを證する。そして同年前後の十五六年間には、冬季に閏はないのである。藤垣內翁略年譜を檢するに、文化十年には大平は五十八歲であり、その年前後十年間に亙つて和歌山にあつた。して見ると前掲の二通もまた大體文化十年前後のものと推定してよからうかと思はれる。

十六

つぎに渡邊刀水氏より提寄せられた同氏所藏の介石書簡の全文を掲げる。

孟春初七日華牘廿七日相達、致拜閲候。先以新禧萬福申收候。御堅固御逾年被成、欣抃之至御座候。野老仍舊重馬齒候。御放情可被下候。貴丈花岡入學之事、内塾生放逸多、學業自然怠漫、岩田世話にて外宅勤學之御樣子、欣抃之至御座候。都會之蔽風不能成功、放蕩遊冶郎に陷、空手にて故郷へ還ル徒多御座候。無御油斷御勉勵可被成候。客冬預御尋忝存候。可及貴回之處、公私多端、老懶怠遨、以外御無音罷過候。御約束之伊孚九法長卷相認候而、共に及御呂(?)可申與淹滯に罷成候。舊年揮掃致置候而、淡彩施設之事此節に相成候。孚九鑒定相認候樣御約束申候其節之稿を失候て(?)、此度珍書懸御目申候。御一粲可被下候。孚九は尋常之品にては無之、南宗家の證據人にて御座候ゆへ、世上畫癖之人々へ此議を演說に及申度候へ共、多忙援筆著述可致閑適も無之、文盲筆鈍、聊之小說も埒明かね、獨嘆致申候。餘春中期面罄候。匆々頓首。正月廿七日、介石山人、南浦詞丈。

尙々いつ比御歸省可有之候歟、小原氏及某寺へ返簡、其節御賴申入候所、書不能盡言、頓首。

宛名の南浦といふは未だその人を詳かにせぬが、和歌山より那賀郡平山に到つて、同地の華岡青洲に就いて外科醫術を學んでゐたのであらう。

つぎに醫學博士南大曹氏所藏の一通を掲げる。これは原敬吾氏の手寫して贈られたものに據る。

二六

第五隆口代

此間被仰付候鄙字一帖詠梅名句若干、例之拙醜愧慙畏惶仕候。此間殊外多忙、不得寸暇、殆淹滯恐入候。御海涵可被成下候。

一平井君明畫人内一幅拜賞仕候。行家(?)之手段尋常之品とも不相見、甚以見事成御幅に御坐候。印章文字難讀奉存候。□御傳辭奉憚候。其内拜謁可申上候。

一御寫字感賞無限奉存候。殊外御進達被遊候。さて〳〵恐入候義奉存候。共完璧仕候。一兩日經候へば少々寸暇も可有御座、罷出萬縷可申上候。匆々頓首。二月廿日。

宛名を缺いてゐるが、これに據れば介石から書道の指導を受けてゐた人もあつたのである。右に見える介石の肉筆の法帖が、もし現に傳へられてゐるならば、それはまた珍とするに足るであらう。

以上を草してから、私は圖らずも地方の某古書肆の目錄に介石の書簡一通が出てゐるのを見つけて、直ちに註文して、入手した。最後にそれを載せておくこととする。

小坂内匠樣拜復、野呂九一郎。

芳墨忝拜見、新禧佳祥萬福申收候。益御清健被爲揃、奉敬壽候。然者淺井養徹子御逢被成度由指支無之候はゞ拜話可致段、御紙上之趣辱奉承知候。早速拜顏仕度奉存候處、舊痾早春者疼痛强、御對話難澁仕候。少々得和暖候はゞ、何卒得御意申度奉存候。暫御猶豫被下候樣、宜御致謝可被下候。何分宜被仰陳可被下候。心縷其内期拜顏之時候。頓首。正月廿日。

尙々御端書、忝奉謝候。尙又宜申上度申出候。宿疾臥褥、動搖難澁仕候。豚兒共他□(?)御無音、奉肖本意候。臥褥亂書、御免可被下候。

宛名の小坂内匠と、文中の淺井養徹とについては共に知るところがないが、介石は、内匠の紹介で養徹が來訪しようとしてゐるのに、

宿痾を理由として延期を乞うてゐる。年次は知り難いが、歿年に近い頃のものだつたのであらう。

なほ本誌第五十六號所載の大和室藏間雲一朶の中にも介石の書簡二通がある。その寫眞版にもなつてゐる一通の中に、「□縷期拜眉可奉謝」としてある上の二字は前出のものにもあるが、私はそれをしばらく「心縷」と讀んでおいた。なほ考ふべきであらう。介石の書簡は存外讀みにくく、前出の數書中にも或は誤讀のなきやを保し難い。介石の作品のまだ埋もれてゐるものも世に出したいが、同時にまたその傳記資料となるべき書簡の類も知りたいものである。

追記

文化十年九月二十五日に、大阪山小橋の大應寺に於て、木村兼葭堂の十三回忌がその子孔陽に依つて營まれた。その十三年は翌十一年になるのを豫修したのである。この時、諸家の惠贈するところの書畫を堂中に陳列し、後にその目錄を「癸酉九月展觀目錄」といふ小冊子一冊として刊行した。昨年の夏名古屋に村野時哉翁を訪うた時に、私は翁の所藏せらるゝ同書を偶目したのであるが、その中に「秋林閑寂圖、野呂介石」といふ一項があつた。介石は故人のために、紀伊よりはるばる右の一圖を寄せたのである。

介石と黃大癡の天池石壁圖とのことは、本稿第八章の中に敍したが、その後また淺野梅堂の漱芳閣書畫銘心錄にもそのことを述べてゐる一節のあつたことを知つた。それに據れば、梅堂は同圖には多少の疑念を挾んでゐるのであるが、この條も同圖に就いての文獻の一として、一部分をこゝに摘出しておきたい。

……獨聞黃大癡天池石壁圖絹本、藏在和州多武峰千手院、余在浦鎭、東南都尹川路孔彰、搜求不得其狀、壬子〔嘉永五年〕來京、遣人赴多峰探此、又不得、後聞在府之騎士中條某家、某謹戀不輕示人、就其戚屬討之、終不知有無、僅寄示其標本、嘗耳高孟彪、圓應擧、第五隆、並有摹本、而隆摹最精妙、蓋極畢生之力、其技從此大進云、後得其本、層巒重嶂、位置深密、比向者所覽、覺精妙萬萬、然氣韻不甚揚、其用工、頗自榻本來者、隆跋自言、一丘一壑盡造化之眞態、因之始識黃之妙場者、幾乎過評矣、從是奈不復甚欲索其眞蹟也……

川路孔彰は聖謨である。黃の天池石壁圖に就いては、なほその道の人々の他日の檢討を俟つべきであらうが、このやうな世評の高い畫が今以て研究家の眼に觸るゝことなくして、祕藏せられたまゝになつてゐることが甚だ遺憾に思はれる。

介石書簡　東京　森銑三氏藏

なほ漱芳閣書畫銘心錄には、伊孚九、費漢源、張秋谷、江稼圃のいはゆる來舶四家の力量を認めずして、「四氏之畫卽西土俗態、無異乎我俗畫」といひ、「如伊孚九、以渦筆焦墨、取勢于頹峰倒樹之間、其筆較涉密者鹵莽太甚、有倪迂之體、局無其學」といひ、ついで介石を引き來つて、「近時第五隆、終身欽仰、而不自知其畫出于孚九之上也」といつてゐる。孚九と介石との優劣論は、こゝには別問題とするも、梅堂の言には傾聽に値するものがあるであらうと思はれる。

その後高森碎巖翁の自知齋文稿を見たら、その中に介石の作品に題した鑑記數條があつて、介石の畫の自ら偲ばれ來るものがあつた。依つてそれらをこゝに抄出しておくこととする。

野呂介石竹石圖、灑然下筆、元氣淋漓、多得秀逸之趣、無意于學之、而自得大蘇之心法、眞是畫竹之上乘。

介石骨氣朗暢、竹石奇宕不凡、愛石能守師法、世稱三石、各有所長、併掛壁間品評、任觀者之所好、亦一時之適也。

仙妃出浴、可比其潔、高士向風、可輸其清、胸裏無塵埃、故能如此、介石出色之作、名下有實、對之將焚筆硯、敬服敬服。

介石那智瀑三幀、介石問畫法於池大雅、大雅曰、子之所居、山水明媚、可以爲師、介石有悟、山水別成一家、平生所作、渾厚而有自然之妙、今觀之益信其所養之不凡、嘆賞之餘題之。

（昭和十三年一月十五日脱稿）